

# 多文化社会のケア、エスニシティ、ジェンダー —英国パキスタン系移民の高齢者介護の事例から—

工 藤 正 子

## 要 旨

本稿の目的は、多文化社会におけるケアとエスニシティ、ジェンダーの交差について、英国のパキスタン系移民のケアを事例に検討することである。英国のパキスタン系移民社会では現在、高齢期を迎えた一世の介護が課題となりつつある。本稿ではパキスタン系の移住プロセスと英国における社会経済的地位を明らかにしたうえで、移民の高齢者が直面する経済的およびその他の格差を指摘する。つぎに、公的介護支援の利用における問題とそれに関連して出現した文化的に配慮したサービスについて述べる。後半では、英国の介護政策でいっそうの重要性を帯びてきた家族による介護に焦点をあてる。まず、パキスタン系の家族の諸特徴とそこで親のケアがどのような行為から構成されているかを示したうえで、家族内におけるケア責任の配置について述べる。つづいて、女性に期待される役割を議論し、結婚や就労をめぐる変化のなかで女性たちがケア役割をどう捉え、実践しているのかを聞き取り調査の結果をもとに議論する。最後に、議論を総括し、それが示唆するところを考察する。

キーワード：英国、パキスタン系移民、多文化社会、ケア、ジェンダー

## 1. はじめに：多文化社会とケア

先進諸国で急速に進む人口の高齢化は、労働の女性化やグローバル化と交差していっそう複雑な様相を見せ始めている。これまでは主として先進諸国で移住者が担うケア労働に関する研究が蓄積されてきた（Parreñas 2001、Lan 2006、上野 2011など）。しかし、こうした移住労働者たちもまた、移住プロセスが進行するなかで自らの世代更新のためのケア労働を誰が行うのかという課題を抱えている。移住者の子の養育については、女性たちのトランスナショナルな母親業（Hondagneu-Sotelo et al. 1997など）や、出身国の親族という資源の動員（ジョージ 2011 [2005] など）がとりあげられてきた。一方で、移住者自身の高齢化や移住者の親の介護に焦点を当てた研究はこれまで限定的なものであった（Baldassar et al. 2007など）。多文化化する社会空間において人々は老いをいかに経験し、その介護を、国家や地域社会、家族、移民の送り出し社会といった異なるアクターがいかに捉え、実践し、その帰結として社会にいかなる動態が生まれているのだろうか。移住者たちのケア実践を明らかにすることは、国家の多元化における諸課題や、グローバル化を背景に日常の親密なつながりが再編されていくプロセス

をも照射することにつながるだろう。

本論文は、こうした視野から、英国の南アジア系移民、とりわけパキスタン系の高齢者ケアに焦点をあて、現在継続中の聞き取り調査の結果をもとに予備的考察を行うことを狙いとする。英国では1990年の「国民保健サービス（NHS）およびコミュニティ・ケア法」（National Health Service and Community Care Act）などをへて、高齢者や障害者のケア政策は、施設介護から利用者の自律性や選択に重点をおく居宅介護へと大きくシフトしてきた（Harper et al. 2005：159ほか）。この変化のなかで、ケアの市場化とともに、家族を中心的担い手とする無償のケアが重要な位置を占めるようになってきている（Ballock 2007）。当然ながら、こうした無償のケアの利用可能性は、高齢者がおかれた家族や地域コミュニティのありようと深くかかわる。このため、本稿の後半では私的領域に主な焦点をあててパキスタン系高齢者ケアをめぐる考察を行いたい。

以下ではまず、調査地バーミンガム市のパキスタン系移民の移住プロセスと社会経済的位置を概観したうえで、パキスタン系高齢者が直面する経済的およびその他の格差を明らかにし、これら高齢者が公的支援を受けるうえでの諸課題を概観する。つづいて、パキスタン系移民の家族形態の諸特徴とその変化を論じたあと、家族におけるケア責任がどのように配置されているのかを議論する。最後に、国家の福祉政策や移民社会のジェンダー規範においてケアの担い手として期待される女性たちが、自らの役割をいかに交渉しているのかを、主に2012、2013年のバーミンガム市における聞き取り調査の結果から考察する<sup>1)</sup>。

## 2. バーミンガム市のパキスタン系移民

### 2-1. 移住のプロセス

2011年国勢調査によれば、イングランドとウェールズ地方の人口（5,607万5,912人）中、「アジア系（Asian）」<sup>2)</sup>と自認する人々は7.5%おり、そのうち「パキスタン系」が2.0%（112万4,511人）を占めた（ONS 2012：10）。1947年に英領インドから分離独立したパキスタンからの移住先はマンチェスターや調査地であるバーミンガムなど、英国中西部から北部にかけての産業都市に集中し、1950～60年代の移住者の圧倒的多数は単身男性であった。1948年国籍法で

- 
- 1) 本稿は、科学研究費補助金「基盤研究(C) (H24～H26年度)「多文化社会のケア・ジェンダー・エスニシティ：パキスタン系イギリス女性の事例から」(研究代表者：工藤正子、課題番号24520928)」および京都女子大学の平成25年度学外助成金の経費助成を受けた研究成果の一部である。調査ではパキスタン系女性たちを主な対象に家族状況や家内および有償のケア役割について聞いたほか、市職員、市民団体、介護施設の運営者やスタッフ（南アジア系移民1～2世の男女）に活動に関する聞き取りを行った。また、市営および民間のデイケアセンターや非営利組織での高齢者や介護者（ケアラー）への支援活動の参与観察も行った。本稿の内容は、上記調査に先行する調査「科学研究費補助金：基盤研究(C) (H21～H23年度)「現代イギリスのパキスタン系ムスリム女性の就労意識と実践」(研究代表者：工藤正子、課題番号21520810)」の結果も反映している。
  - 2) 国勢調査では、エスニック集団の帰属を問う質問がある。アジア系（“Asian/Asian British”）の下位区分としては、パキスタン系（2.0%）のほか、インド系（2.5%）、バングラデシュ系（0.8%）、中国系（0.7%）、他のアジア系（1.5%）となっており、南アジア系が多数派を占める（ONS 2012：10）。

はパキスタン系を含む旧植民地出身の移住者は入国や労働などの自由が与えられたが (Mason 2000: 25)、その後次第に移民政策は厳格化し、移入の流れは家族結合へと変化した。パキスタン系移民は他の南アジア系移民やアフロカリブ系移民等と同様、有色移民として人種化され、排除されてきた。さらに、パキスタン系移民にはイスラーム教徒が圧倒的多数を占めることから、サルマン・ラシュディの小説『悪魔の詩』をめぐって立ち起こったラシュディ事件 (1989年) ののち、2001年の同時多発テロや2005年のロンドン連続爆破事件をへて、ムスリムとしても他者化され、英国内の「内なる他者」として表象される傾向が強まった。

調査地であるバーミンガム市は18世紀までに有数の産業都市としての基盤を形成し、19世紀にはアイルランドからの移民が増加した。1950年代から1960年代には、南アジアやカリブ海諸島など旧植民地出身の労働移民が増加し、製造業を中心とする単純労働に従事し、第二次世界大戦後の英国の経済復興を底辺で支えた (Brah and Shaw 1992: 11-12)。1980年代の不況と産業構造の転換のなかで都市は荒廃したがその後、中心部の再開発が進んでいる (鈴木 2008)。

バーミンガム市のエスニック集団別の構成をみれば、2001年国勢調査で、「白人 (White)」以外のエスニック集団に帰属すると回答した人が市人口の30%を占め、2011年にはさらに増加し (市人口107万3,045人中の42.1%)、英国内でも多様性の高い都市であることがわかる。パキスタン系人口の増加はとりわけ著しく (2011年に14万4,627人で市全体の13.5%)、1991年と比べ2倍以上となっている (Birmingham City Council 2013: 8)。

## 2-2. 社会経済的地位：南アジア系およびパキスタン系内部での多様性と動態

南アジア系移民はエスニシティにより、移住時期や英語力などの資源に差異がみられるが、その経済的格差は1980年代以降顕在化した (Modood et al. 1997)。バーミンガム市のエスニック集団別の労働力率、失業率でみると、パキスタン系男性はバングラデシュ系と並んで状況が悪い。工場などでの単純労働に従事者が多かったこれら二集団は、1980年代の英国の産業構造の転換と不況で深刻な打撃をうけ、1991年には市のパキスタン系男性の56%が失業状態であった (Chishti 2008: 31)。近年、大学進学率の高まりなど教育レベルの上昇もみられる一方で、集団としての経済的地位は依然として低位にある。パキスタン系とバングラデシュ系のさらなる特徴は、女性の就労率がきわだって低い点であり、その背景には、宗教的、文化的な男女隔離の理念のみならず、労働市場での差別や、女性たちが英国に移住した時期<sup>3)</sup>の経済状況や産業構造などの諸要因が交差する (以上、工藤 2011)。こうした女性の就労率の低さは世帯の収入の低さにもつながっている。

「パキスタン系」内部での多様性にも注意が必要である。バーミンガム市のパキスタン系人

3) パキスタン系の家族 (妻子) の合流が主として1970年代～1980年代に生じ (Shaw 2004: 199)、バングラデシュ系はさらに遅れたのに対し、インド系のシーク教徒とヒンドゥー教徒たちの多くは1960年代から70年代初頭に家族合流をしていた。パキスタン系やバングラデシュ系の場合は、家族合流の時期に移民法制が厳格化していたために家族の呼び寄せにも困難を伴ったことが指摘されている (Ahmad 1996: 65)。

口はインナーシティと呼ばれる市中心部に集住しているが、一部の人々は経済的上昇にともない、より豊かな層が住む郊外に拡散してきた。また、二世や三世が多いが、成長期に移住したいわゆる1.5世もいることにくわえ、パキスタン本国からの婚姻移民の流れも継続している。このため、これらの人々の英国内におけるマイノリティとしての立場性には共通性と差異がある。さらに、ミールプール系かパンジャブ系かなどの言語、文化的差異や、階層や世代などのさまざまな要素が交錯して、「パキスタン系」が自己を定義するための参照点は、複数かつ重層的である。

### 3. 移民社会における高齢者介護

#### 3-1. パキスタン系移民一世の高齢化と格差

2011年の国勢調査によれば、バーミンガム市のパキスタン系の年齢別構成は、15歳までが35.7%、16-64歳が59.6%、65歳以上の人口が4.7%となっている（Birmingham City Council 2013）。白人系や、移住時期が先行したアフロカリブ系集団と比べて若年層の割合が大きいものの<sup>4)</sup>、現在では一世が高齢期を迎えつつある。

一世は、移住初期には一時的な出稼ぎという意識が強かったが、英国に家族が合流し、定着するにつれ、帰国して余生をパキスタンで過ごすことが非現実的なものとなっていった。帰国をめぐる一世の希望と現実のずれは、Muhammad Anwarの「帰還神話」（myth of return）という表現に端的に示されている。パキスタン系移民は、英国社会で有色移民やムスリムとして多重に他者化されてきた一方で、訪問や送金、子の縁組などをおして本国とトランスナショナルな関係を構築してきた。しかし、南アジア系移民と本国の親族との関係はときに葛藤をはらみ、常に調和的なものではない（Qureshi et al. 2012）。

こうして複雑な過程をへて高齢化する移民一世の老いの経験は、白人系の高齢者のそれと同列に考えることはできない。その主な理由の一つに主流社会との経済的格差がある<sup>5)</sup>。経済的格差は移民の健康面での格差にもつながっており、バーミンガム市の調査では、白人集団よりもマイノリティ集団の健康状態が悪いことが明らかとなっている。男性たちが工場労働者や自営業者として長時間の重労働をつづけたことは、高齢期の健康に悪影響を及ぼしただけでなく、そのために退職後の社会関係や活動範囲が狭く、それが生活の質の低下にもつながっているという（以上、Blakemore and Boneham 1994 : 47, 87）。

南アジア系移民社会の高齢者の経験については、ジェンダー差にも言及する必要がある。南

4) 例えば、「白人のブリティッシュ（“White British”）」では65歳以上の人口が18%を占める（Birmingham City Council 2013）。

5) ナズルーほか（2009 [2004] : 60）は、エスニック・マイノリティ高齢者の経済的劣位の背景には、①移住後に、全般的に低賃金で保障が低く、年金資格が限定されている仕事に就かざるをえなかったことや、②1980年代の英国の製造業の衰退によって年金支給開始年齢前の期間に失職などの理由のために働けなかったことなどの構造的な諸要因があることを指摘している。



アジア系で高齢化が始まった1980年代には、デイケアなどの介護サービスの利用者に女性が少ないことが指摘されており、その理由として、私的領域を中心に生きてきた女性の場合、家庭外で仕事をしてきた男性に比べ、英語力の問題のほか、車などの移動手段がないなどの問題が指摘されている（Blakemore and Boneham 1994：115）。しかし、筆者の2012、2013年の南アジア系高齢者用の複数のデイケアセンターでの参与観察では、一般的に男性より女性の利用者のほうが多くみられた。この理由として、ある民間施設のセンター長は、一世の男性の利用者の多くが亡くなったことや、女性のほうが「社交的であること」などを理由に挙げている（聞き取り、2012年）。

パキスタン系やバングラデシュ系の一世の女性たちは就労率が低かったことから、とくに社会的孤立の問題が指摘されてきた<sup>6)</sup>。他方で、南アジア系女性たちは、私的領域での贈与交換や儀礼、訪問などをつうじて移民社会のネットワーク形成に大きく貢献してきたことも明らかにされている（Werbner 1990など）。女性の高齢者が、主流社会や移民社会で経験する多重の差別や不利益を明らかにすることが求められる一方で、彼女たちが創造してきた社会的ネットワークにも目を向けたうえで、老いの経験を理解する必要がある<sup>7)</sup>。

### 3-2. 公的支援を利用するうえでの諸課題

パキスタン系移民の老後の問題として次に挙げられるのは、主流社会や行政の側に、「マイノリティは高齢者を自分たち（とくに家族）で世話するもの（“They look after their own”）」というステレオタイプが存在することから、マイノリティの高齢者や障害者に公的サービスの対象として十分な注意が振り向けられてこなかったことである（Mand 2008：190；Shaw 2004など）。

しかし、現実には家族内で葛藤を抱えたり、子のない高齢者や、子がいても頼れない高齢者もいる（Shaw 2004）。くわえて、子がキャリアのために他の都市や海外に移動することもふえた。また、エスニック・マイノリティの高齢者や介護者に公的支援の利用度が低いことの背景には、主流社会の高齢者介護<sup>8)</sup>とは異なるさまざまな要因が存在する。例えば、言語の問題や公的支援の周知が十分でないという問題のほか、被差別経験から公的サービスそのものへの信頼度が低いことが挙げられている<sup>9)</sup>。文化的要因も介在し、パキスタン、バングラデシュ、

6) 男性より女性のほうが孤立しがちなことは、障害をもつ南アジア系の若者に聞き取りをしたHussain et al. (2002：7, 8)にも指摘されている。

7) そうした移民の女性高齢者の生活世界には、階層やその他の諸要因が交差しており、例えば、Murti (2006)は、米国の子どもたちと暮らすミドルクラスのインド系ヒンドゥーの高齢女性が、家族内でのケアの授受や、さまざまな資源の動員をとおして創造する生活様式や関係性を描き出している。

8) マイノリティ高齢者以外でも、一般的に、インフォーマル・ケアと呼ばれる、主に家族による無償の介護が9割を占める（Victor et al. 2012：93）。また、こうした無償のケアが主として女性によって担われていることも、マイノリティだけの問題ではない。英国の福祉政策が女性に無償または安い報酬でのケア役割を期待してきたことはフェミニズムからの批判の対象となってきた（ウォーカー 1997：64-65）。

9) 日本国内のエスニック・マイノリティの介護に関連する数少ない研究として、コリア系介護事業所に関する河本尚枝の研究（2007）を挙げることができるが、そこでもコリア系高齢者が日本人ケア労働者と接する際に、主流社会から受けた差別の経験の記憶が作用していることが指摘されている（河本 2007：92）。

中国系のあいだでは、福祉を受けることが恥やスティグマになっていることも指摘されている (Atkin and Rollings 1996 : 80 ; Shaw 2004 : 199)。

### 3-3. 文化的に配慮した支援サービスの出現

さらに、エスニック・マイノリティ高齢者の多様なニーズに公的支援が対応できていないという問題がある。Blakemore and Boneham (1994 : 15, 119) は、従来の公的福祉支援が移民の同化主義的な統合プロセスを想定していることのほか、福祉国家としての旧来の前提そのものに、万人に対する共通のサービスに利用者の側が適応するであろうというユニヴァーサルリズムの思想があったことを指摘する。

こうしたなかで、南アジア系に特化した介護サービスはエスニック・マイノリティ自らのイニシアティブによって始まったようである。調査では、複数の市営 (1ヶ所)、民間 (2ヶ所)、ボランティア団体 (1ヶ所) による4ヶ所のデイケアサービスや関連する活動の現場を訪問したが、そのいずれもサービスを1980年代に開始している。そのうちの移民支援団体Aによれば、1980年代初頭までは、寄せられる相談は在留許可や税金の制度などについてが殆どであったが、その後、高齢化する一世から、年金の受給や住居問題などについての相談が増え始めたという。行政は当初そうしたニーズを認知しなかったが、同団体は、こうした要請の増加を機に1980年代前半に南アジア系を対象に、「シェルタード・ハウジング (sheltered housing)」とよばれる、まだ日常的介護を必要としておらず、ある程度自律した生活ができる高齢者向けの居住施設の運営を始めた (2011年に公的支援が停止したため、民間に移行 [聞き取り調査、2013年])。

南アジア系高齢者用のデイケアサービスで会った利用者 (東アフリカ経由の南アジア系ムスリム男性) は、以前は一般のデイケアサービスを利用していたが、白人やアフロカリブ系の高齢者が主な利用者で、あまり話しかけてくれる人もおらず孤立しがちであったうえに、イスラーム教徒としてハラール (イスラームで許容された) の食事がとれないという問題があったという (聞き取り、2013年)。このように、マイノリティの介護については、言語や文化、宗教面での特別なニーズへの対応が必要とされる。政策上でも、文化的に配慮したサービス提供の課題は1990年代をつうじて認識されるようになった (Vernon 2002 : 3)。しかし一方で、そうした差異を重視するサービスには、ユーザーや支援者としてのマイノリティを主流社会のサービスから分離、周縁化してしまう可能性や、マイノリティ・スタッフの雇用や訓練をめぐるさまざまな矛盾や課題があることなども指摘されている (Bowes and Dar 2000)。

## 4. パキスタン系における家族、ケア、ジェンダー

以上、パキスタン系高齢者の構造的位置を明らかにしたうえで、公的支援における諸課題について論じた。以下では私的領域内でのケアに目を向ける。Harper et al. (2005) が述べるように、現在の福祉政策で重視されるインフォーマルなケア実践を理解するためには、無償のケ

アの主な基盤となる家族の関係性や、それをめぐる価値体系の動態を理解することが不可欠である。そこで以下では先行研究と聞き取り調査の結果をもとに、(1)パキスタン系移民の家族の関係性、(2)家族構成員のなかで誰が高齢者ケアの責任を負うのかをめぐる理念と実践、(3)女性たちのケア役割とその変容という3点について整理したい。

#### 4-1. パキスタン系における家族とケア

パキスタンでは、地域やエスニシティ、階層による差異や、ライフサイクルや時代による変化はみられるものの、基本的に女性は婚出し、男性とその妻子という複数組の夫婦と子から構成される父系の合同家族が家族の理想とされる<sup>10)</sup>。パキスタンでは、複数の夫婦と子が同じ建物内の各階に住んだり、近隣に住むこともある。英国では家屋の狭さや構造からくる制約から、息子が結婚すると一時的に親と同居することはあるにせよ、長期的には近隣に家を購入してローカルに親族関係を維持する傾向が強い (Shaw 2004: 202-203)。これらの父系合同家族は居住空間は分かれていても、経済的に相互に助け合い、親族集団としての重要な決定事項を共同で行うことが少なくない (Webner 1990 [工藤 2008: 36-38] から再引用)。

家族の紐帯を確認、再形成していくための相互行為としては、そのほかに親による養育と子による親の介護という世代間のケアの互酬が挙げられる (Shaw 2004: 200)<sup>11)</sup>。そうした親に対するケアには、身体的介助にとどまらない、さまざまな諸行為が含まれる。例えば、訪問や電話などをはじめとする日常的な行為は、親への義務と考えられている。

移住という文脈における親子関係の変化として特記すべきは、一世の親たちは、病院や介護サービス業者との連絡のために子に依存せざるをえない場合が少なくない点である。このように、親が国家の福祉や他の公的支援を利用するうえで、子は文化または言語の通訳者という重要不可欠な役割を果たす (Cattan and Giuntoli 2010: 28; Ahmad 1996: 68; Shaw 2004: 219-221)<sup>12)</sup>。

このほか、聞き取りでは、夫の親がパキスタンで一時滞在する費用を負担することを子としての義務の一部として挙げた女性 (二世、40代) もいた。Shaw (2004: 200) は、高齢になると、イスラーム教徒としての宗教的義務がいっそう重要とされることを指摘し、親がそうした義務

10) ただし、親族集団内の内婚が理想とされるため、父系と母系の境界は必ずしも明確なものではない。また、夫方居住であるが、女性が近隣に住む父方の第一イトコと結婚すれば、結果的に実家の近くに住むことになる (Shaw 2004: 201)。海外移住による変化もあり、婚姻移民として英国に移住したパキスタン人男性は、一般的に妻方の家やその近隣に居住することになるため、夫婦間の権力関係にも変動がみられる (Charsley 2005)。

11) 家族の関係性を所与のものとするのではなく、成員間の相互行為をつうじてそのつながりが生みだされ、維持されているとする見方は、他社会についても示されている。例えば、船曳建夫 (2005) は、現代のアメリカ社会の親族関係をめぐる議論のなかで、先進産業社会の親子関係の構築に、介護を含む行為の互酬が新たな意味を持ち始めている可能性を示唆している。

12) 親に主流社会の言語や制度の知識が欠如していることが、移民の親子間の権力関係に影響する可能性もあるが、一方で若い世代にとっても家族のサポートは重要である (Ahmad 1996: 68-71)。Brah (1996: 42-43) が指摘するように、移民の世代間関係には、主流社会からの排除の経験の共有を含む複雑な諸要因が交錯し、単純に一世と二世のあいだの「世代間の葛藤」を前提視することはできない。



を遂行できるようにマッカ巡礼の費用を提供したり、巡礼に同行することなども子の義務として挙げている。

#### 4-2. 親の介護責任をめぐる理念と実践

では、老親をケアする義務は主に誰にあるとされるのだろうか。家族内でのケア責任の配置の理念や実践は文化的に多様である。東、東南アジア社会を比較した落合（2013：185）によれば、傾向として、均分相続の伝統をもつ中国や台湾、タイなどでは子ども全員で親をみるのに対して、日本や韓国など、直系家族制と非均分相続の伝統がある社会では、特定の子（とくに長男）の介護責任が強調され、結果的に長男の嫁に負担が集中する傾向がみられる。また、子ども全員で親をみる社会でも、父系社会の中国では基本的に息子の扶養義務が大きいのにに対して、タイでは妻方居住の慣行が強いため、娘がケアする傾向がある<sup>13)</sup>。

英国の南アジア系移民の間では、親の介護責任は息子にあるとされる<sup>14)</sup>。息子は結婚後も出身家族との紐帯を維持するが、娘は結婚後は嫁ぎ先の家族のケアを期待されるからである（Cattan and Giuntoli 2010：29）。こうした息子の役割規範は、パキスタン系移民社会の名誉をめぐる文化概念にも結びついている。パキスタン系の女性（二世、30代、既婚）は、次のように述べた。「南アジア系のコミュニティではふつう息子に介護責任があるとされる。（中略）例えば、わたしの父親が亡くなったあとに母親が兄の家の隣に引っ越すことになり、これについて周囲はしきりに、よかったねとか、うらやましいといっていた。こういうふうに、息子に世話をされることで親の体面が上がる。（中略）一方で、娘の家ではお茶を飲むことすら遠慮する親もいる。結婚して家を出た娘の結婚生活を邪魔しないことが重要と考えられているので」（聞き取り、2013年）。

夫の父が亡くなり、義母がまもなく同居するというパキスタン系の女性（二世、40代、既婚）も次のように語った。「イスラームやパキスタン系社会では、親の世話の責任は基本的に息子にあるとされるけれど、男性は外で働くので実際は息子の嫁の役割になる。実の娘のほうが互いに気を使わないのでいいと思う。でも、うちの義母にとって実の娘に世話されるのは文化的には受け入れられないことなの」（聞き取り、2012年）。

#### 4-3. 女性のケア役割とその動態

上述のように、親の介護責任は息子にあるが、女性たちは、結婚後は嫁として夫の親をみる役割があるとされる。男性には親に対する経済的な扶養義務があるが、女性は稼ぐことは期待

13) 落合（2013）が指摘するように、こうした家族・親族内のケアが、国家、市場、コミュニティが提供するケアとどうミックスされるかも社会によって多様でかつ変化しつつあり、近年ではとくに家事、介護労働者による商品化されたケアが重要な位置を占め始めている。

14) Shaw（2004：203）は、長男とその嫁に親を介護する義務があるが、既婚の子どもたちのあいだで分担されることもあるという。Ahmad（1996：57）は、通常は末の息子に親の介護責任があるとされ、家を相続するのもふつうは末の息子であると指摘する一方で、移住状況における変化の可能性を示唆している。



されていない代わりに、義理の親の身体的介助やその他のケアが期待されるのである（Shaw 2004：200－204）。

女性に付されたケア役割は、文化的なジェンダー規範や女性性の理念とも結びついている。例えば、Munawar（1997：54）は、パキスタン社会では女性の美徳は「忍耐／自己犠牲」にあるとされ、それを備えた妻・母役割によってのみ女性は社会的に認知されると述べ、女性性の理念に家族への献身が中核をなすことを示唆している。また、Gardner（2002：130－131）もロンドンのバングラデシュ系の中高年女性への聞き取り結果をもとに、女性たち自身の女性性の理念が夫や子に対するケアと不可分に結びついており、さらにケアの遂行はムスリム女性としての宗教的な務めとしても認識されていることを指摘する。

調査からみてきたのは、上述のような義理の親のケア責任を既婚女性たちが単に受動的に受け入れているわけではないことである。Aさん（二世、40代、既婚、専業主婦）のケースでは、夫の父親が亡くなったあと、夫の母は弟夫婦と同居していたが嫁との折り合いが悪くなり、Aさん夫婦が家を改造して夫の母を自分たちの家に引き取った。しかし、要求の多い義理の母の世話をAさんが疲れ果てた頃に母がもとの家に帰りたいと申し込んだため、親族間で話し合いをもうけ、夫のキョウダイのあいだで世話を分担することにした<sup>15)</sup>。Aさんは、夫の母と同居した1年をふりかえり、「（義母の要求を）いかに断るのかを学ぶプロセスであった」と形容し、また、親の介護経験を契機に、これまでは家族の世話に忙殺されて自分を顧みなかったことを反省的にふりかえるようになったという（聞き取り、2013年）。

また、Bさん（二世、40代、既婚、高校教師）は、闘病中の夫の父を見舞うため2ヶ月ほど、車で一時間弱の街に夫とともに頻繁に通っていた。夫の父が亡くなってからは、一人暮らしをする夫の母の家に毎週末通っている。夫方親族の年長者たちからは、Bさん夫婦と子が、夫の母と同居すべきという圧力を受けている。しかし、Bさん夫婦は生活基盤がある今の居住地からの転居は考えておらず、訪問をとおして夫の母への義務を果たす考えであるという（聞き取り、2013年）。Bさんが夫方親族からの圧力に屈せず、夫の母への義務の履行として代替的な方法を実践できていることの背景には、市役所勤務だった夫の収入が近年の人員削減によって不安定となり、高校教員のBさんの収入が家計に不可欠となっていることが大きいといえよう。

このほか、経済階層の高い女性のあいだでは、ケアの市場化が進むなかでケアの外部化も進んでいる。例えば、富裕層が住む地域に暮らす専門職の女性（パキスタン系、二世）が筆者の調査のために、近隣に住む母親に家族のケアをしている友人はいなかと聞いてくれたところ、周囲の女性たちは「介護しているというより、介護してくれる人を雇っているだけ」と冗談ま

15) 聞き取りでは、パキスタン系のあいだで、複数の息子の家を、親が数ヶ月ごとにまわるというケアの分担が行われていることも明らかとなった。こうした形態についてはShaw（2004：208）にも報告されている。

じりの答えが返ってきたという（2013年、聞き取り）<sup>16)</sup>。

さらに、息子やその嫁が親をみるという文化規範が存在するのに対して、調査ではシングル女性がさまざまなかたちでケアに関与し始めていることも明らかとなった。結婚は、パキスタン系移民社会で中心的規範でありつづけているが、一方で、女性の考えや実践は変化しつつあり、独身女性や離婚した女性もふえつつある。例えば、独身のCさん（二世、40代、専門職）は、自分の貯蓄で親の近くに家を買ひ、現在は親の家と自分の家を頻繁に行き来する生活を送っている。親は娘の一人暮らしに対する移民社会の噂をおそれて別居を反対していたが、時間をかけて親を説得した。また、Dさん（二世、40代、非常勤の小学校教員）は、離婚して実家に戻り、シングル・ペアレントとしての公的支援を受けつつ、子育てをしている。

これらの女性たちは、結婚して義理の親の世話をする代わりに、自分の親を男兄弟と共同で、あるいは、国内や海外で別世帯を構える男兄弟よりも密に世話している。上記のDさんはつぎのように述べた。「親はパキスタンに仕送りをはしてきたけれど、親の介護経験はない。だからわからないと思うけれど介護は大変なこと（中略）。わたしはシングル・ペアレントとして子を世話するだけでなく、親も世話しないといけない。南アジア系コミュニティでは、親をみる責任は男性にあるといわれる。でも、実際には嫁が世話をしているし、女性たちは実の親の世話も結局やっている。まわりの友人をみても、男兄弟が親の世話をしているわけではなく、（実の）娘の肩にかかっているのよ」（聞き取り、2011年）。

#### 4-4. 変容の背景にある諸要因の考察

このように、パキスタン系の女性性の理念とも結びつけられたケアの意識や実践の仕方には、さまざまな変化が生じている。こうした変化の背景には女性たちのエスニシティや階層、個別の家族状況などが交錯しているが、重要な要因の一つとして女性たちの就労を挙げることができる。第2節で述べたように、パキスタン系とバングラデシュ系女性の就労率は他のエスニック集団と比べると低いが、近年では、女性の進学率の上昇や夫の収入の不安定化のなかで、家外で働く女性はふえている（工藤 2011）。

そうしたなかで、前述のBさんの例に明確にみてとることができるように、経済力の獲得が、既婚女性のケア責任をめぐる交渉の余地を生むケースがあることはたしかだろう。ただし、女性の経済力の獲得によって、夫との権力関係や家事やケアをめぐる役割分業の変化がどの程度生じているかについては先行研究でも議論が分かれる。Waqar I. U. Ahmad (1996 : 66-68) が整理するように、南アジア系スィク女性の賃金収入が家内における女性の発言力や影響力を増しているとするBhachu (1996) のような見方がある一方で、女性たちの賃金労働は依然として男性のコントロール下をでていないとみる研究もある。このほか、女性の就労経験が家内

16) Ahmad (1996) によれば、労働者階級とミドルクラスでは、前者が親族の無償のケアに依存する傾向にあるのに対し、後者は、既存の支援制度を利用したり、ケアを購入するため、親族ネットワークへの依存度が低いという差異がみられる。

の位置どりに変容をもたらしていることを明示しつつ、そこには親世代からの継続と変容の双方が入り組む複雑なプロセスがあることを強調する研究は少なくない（例えば、Ramji (2003) など）。

より明確なのは、女性の就労によって、親族女性や階層の異なる女性とのケアの分業が生じている点である。パキスタン系女性に対する家事、子育てについての聞き取り調査からも、女性が就労しても、夫と家事、育児を分担するというより、親族女性（とくに、同居したり、近隣に住む義母）や地域の友人女性たちから支援を受けるケースが多いことが明らかとなった（工藤 2011：190）。つまり、夫婦間の役割分業の再構成というより、女性間でのケアの分業がみられるのである。また、上述のように、階層の高い女性たちのあいだでは、同様に女性化された領域である市場化されたケアを購入するという状況もみられる。

このように、ケアをめぐる女性の認識や実践に変化がみられる一方で、ケアは依然として女性化されており、立場の異なる女性のあいだで分業されている。ケアの新たな分業の様態を明らかにしていくとともに、そこに介在する、エスニシティや階層をはじめとする諸要素の相互作用を明らかにしていくことが求められている。

例えば、女性たちのケア役割の動態に作用する外的要因の一つに、国家の政策がある。エスニック・マイノリティが国家の福祉サービスを受けるうえでは第3節に述べたようなさまざまな制約があるが、そうした公的支援は移民の高齢者が一定程度自律した生活をすることを可能にしている（Mand 2006）。シングル女性が親をケアをするようになった背景にも部分的に、親が英国市民として公的支援を受けられることがあるだろう。一方で、Gardner (2002：132) が議論するように、例えば、介護者給付（carers' allowance）などの国家の制度によって、文化的に価値づけられた移住女性のケア役割がいつそう固定化される状況も生まれている。

さらに、女性のケア役割の変容を考えるうえで、女性が高等教育への進学や就労を介して拡大する家外の相互扶助のネットワークも見逃せない。そうした女性たちのネットワークが、一世の母親たちが私的領域における儀礼や贈与交換をとおして構築してきたネットワークとどう重なり、また異なるのかを検討し、女性たちの社会的ネットワークの構築が家内のケア役割の再編にどのように作用しているかを明らかにしていく必要がある。

## 5. おわりに

本稿では、英国の南アジア系とりわけパキスタン系の高齢者が経験する構造的格差の問題を指摘したうえで、公的な介護サービスの利用上の問題点やそれへの対応としての文化的に配慮したサービスの出現について述べたあとに、家族内介護に焦点を当てた。そこからは次の2点を指摘することができる。

第一に、南アジア系移民の家族内介護の状況は、エスニシティや階層、移住の時期の差異などの複合的な諸要因によって多様であり、主流社会の「エスニック・マイノリティは公的支援

を必要としない」というステレオタイプでは捉えきれない。また、女性の就労やケアの市場化による変化も生じている。Harper et al. (2005) らが主張するように、エスニック集団内での家族や親族関係の多様性やその社会経済的な動態を把握したうえで、国家の福祉支援を再構築していく必要がある。

第二に、国家のケア政策においても、パキスタン系移民社会内の文化規範においても、女性の無償のケアが期待されており、家内のケアは女性化された領域でありつづけている。一方で、親族内の位置や経済階層などが異なる女性たちのあいだでケアの分業が生じつつある。女性たちのケア役割の遂行やそれに対する認識は、彼女たちの教育や就労、それによる経済力の獲得の作用を受けるだけでなく、高齢者や女性に対する国家の福祉政策や、女性たちがつくりだす家庭外の社会的ネットワークのありようとも不可分に結びつく。移民の世代が進行し、社会の多文化化が深化するなかで、女性たちが、家族、エスニック・コミュニティ、国家などの重層的空間において、ケアをいかに遂行し、誰と分担し、そこから自らの女性性やエスニック・アイデンティティをいかに交渉し、再構成していくのかを注視していく必要がある。

#### 参考文献

- 上野加代子 (2011) 『国境を越えるアジアの家事労働者：女性たちの生活戦略』 世界思想社。
- ウォーカー、アラン (1997) 『ヨーロッパの高齢化と福祉政策』 (渡辺雅男・渡辺景子訳) ミネルヴァ書房 (MINERVA福祉ライブラリー18)。
- 落合恵美子 (2013) 「ケアダイヤモンドと福祉レジーム：東アジア・東南アジア6社会の比較研究」 落合恵美子 (編) 『親密圏と公共圏の再編成：アジア近代からの問い』 京都大学学術出版会、pp. 177–200。
- 河本尚枝 (2007) 「多文化共生に向かうケアサービス：コリア系介護事業所の設立」 久場嬉子 (編) 『介護・家事労働者の国際移動：エスニシティ・ジェンダー・ケア労働の交差』 日本評論社、pp. 75–98。
- 工藤正子  
(2008) 『越境の人類学：在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』 東京大学出版会。  
(2011) 「移民女性の働き方にみるジェンダーとエスニシティ：パキスタン系イギリス女性のコミュニティ・ワークを中心に」 竹沢尚一郎 (編) 『移民のヨーロッパ：国際比較の視点から』 明石書店、pp. 172–197。
- ジョージ、シバ、M. (2011 [2005]) 『女が先に移り住むとき：在米インド人看護師のトランスナショナルな生活世界』 (伊藤り監訳) 有信堂。
- 鈴木茂 (2008) 「ポスト工業化時代の都市再生と地域経済：イギリス・バーミンガムを事例に」 中村剛治郎 (編) 『基本ケースで学ぶ地域経済学』 有斐閣ブックス、pp. 270–287。
- ナズルー、ジェイムズほか (2009 [2004]) 「民族的格差」 アラン・ウォーカーほか (編)、山田三知子訳 『高齢期における生活の質の探求：イギリス高齢者の実相』 ミネルヴァ書房、pp. 39–62。
- 船曳建夫 (2005) 「結婚—二つの古典の解説法」 山下晋司 (編) 『文化人類学入門：古典と現代をつなぐ二〇のモデル』 弘文堂、pp. 168–179。
- Ahmad, Waqar I. U. (1996) “Family Obligations and Social Change among Asian Communities,” Waqar I. U. Ahmad et al. (eds.), *‘Race’ and Community Care*, Open University Press, pp. 51–72.
- Atkin, Karl and Janet Rollings (1996) “Looking after Their Own? Family Care-giving among Asian and Afro-Caribbean Communities,” Waqar I. U. Ahmad et al. eds., *‘Race’ and Community Care*, Open University Press, pp. 73–86.
- Baldassar, Loretta et al. (2007) *Families Caring Across Borders: Migration, Ageing and Transnational Caregiving*, Palgrave MacMillan.
- Ballock, Susan (2007), “Care, Citizenship and Community in the UK,” Susan Ballock and Michael Hill eds.,



- Care, Community and Citizenship: Research and Practice in a Changing Policy Context*, The Policy Press, pp. 21 – 39.
- Bhachu, Parminder (1996) “The Multiple Landscapes of Transnational Asian Women in the Diaspora,” *Resituating Identities: The Politics of Race, Ethnicity, Culture*, Vered Amit-Talai and Caroline Knowles (eds.), Broadview Press, pp. 283 – 303.
- Birmingham City Council, Corporate Strategy Team (2013) *Census 2011: What does this mean for Birmingham?* Oct 2013.
- Blakemore, Ken and Margaret Boneham (1994) *Age, Race and Ethnicity: A Comparative Approach*, Open University Press.
- Bowes, Alison and Naira Dar (2000) “Researching Social Care for Minority Ethnic Older People: Implications of Some Scottish Research,” *British Journal of Social Work*, 30, pp. 305 – 321.
- Brah, Avtar (1996) *Cartographies of Diaspora: Contesting Identities*, Routledge.
- Brah, Avtar and Sobia Shaw (1992) *South Asian Young Women and The Labour Market: A Report for the Department of Employment*, Centre for Extra-Mural Studies, Birkbeck College, University of London.
- Cattan, Mina and Gianfranco Giuntoli (2010) *Care and Support for Older People and Carers in Bradford: Their Perspectives, Aspirations and Experiences*, Joseph Rowntree Foundation.
- Charsley, Katherine (2005) “Unhappy Husbands: Masculinity and Migration in Transnational Pakistani Marriages,” *Journal of Royal Anthropological Inst. (N.S.)*, 11, pp. 85 – 101.
- Chishti, Makhdoom Ahmad (2008) “Pakistani Community,” Makhdoom Ahmad Chishti (ed), *Lok Virsa: Cultural Heritage*, Brewin Books, pp. 31 – 33.
- Gardner, Katy (2002) *Age, Narrative and Migration: The Life Course and Life Histories of Bengali Elders in London*, Berg.
- Harper, Sarah et al. (2005) “Family Care, Independent Living and Ethnicity,” *Social Policy and Society*, 4, pp. 157 – 169.
- Hondagneu-Sotelo, Pierrette et al. (1997) “‘I’m Here, but I’m There’: The Meaning of Latina Transnational Motherhood,” *Gender & Society*, 11 (5), pp. 548 – 571.
- Hussain, Yasmin et al. (2002) *South Asian Disabled Young People and Their Families*, The Polity Press and the Joseph Rowntree Foundation.
- Lan, Pei-Chia (2006) *Global Cinderellas: Migrant Domestic Workers and Newly Rich Employers in Taiwan*, Duke U.P.
- Mand, Kanwal (2006) “Social Relations beyond the Family?: Exploring Elderly South Asian Women’s Friendship in London,” *Community, Work and Family*, 9 (3), pp. 309 – 323.
- (2008) “Who Cares? ‘External,’ ‘Internal’ and ‘Mediator’ Debates about South Asian Elders’ Needs,” Ralph Grillo (ed.), *The Family in Question: Immigrant and Ethnic Minorities in Multicultural Europe*, Amsterdam U.P., pp. 187 – 204.
- Mason, David (2000) *Race and Ethnicity in Modern Britain*, Oxford U.P.
- Modood, Tariq et al. (1997) *Ethnic Minorities in Britain: Diversity and Disadvantage*, Policy Studies Institute.
- Munawar, Riffat (1997) *Intergenerational Cultural Differences Among Muslim Women in Wollongong*, MA thesis. University of Wollong.
- Murti, Lata (2006) “At Both Ends of Care: South Indian Hindu Widows Living with Daughters and Daughters-in-law in Southern California,” *Globalizations*, 3 (3), pp. 361 – 376.
- ONS (Office for National Statistics) (2012) *Census: Key Statistics for England and Wales*, March 2011.
- Parreñas, Rhacel S. (2001) *Servants of Globalization: Women, Migration and Domestic Work*, Stanford U.P.
- Qureshi, Kaveri et al. (2012) “Migration, Transnationalism, and Ambivalence: The Punjab-United Kingdom Linkage,” Pirkko Pitkaennen et al. (eds.), *Migration and Transformation: Multi-Level Analysis of Migrant Transnationalism*, Springer, pp. 13 – 61.
- Ramji, Hasmita (2003) “Engendering Diasporic Identities,” Nirmal Puwar and Parvati Raghuram (eds.), *South Asian Women in the Diaspora*, Berg.

- Shaw, Alison (2004) "British Pakistani Elderly without Children: An Invisible Minority," Philip Kreager and E. Schroeder-Butterfill (eds.), *Ageing without Children: European and Asian Perspectives*, Berghahn Books, pp. 198 – 222.
- Vernon, Ayesha (2002) *User-defined Outcomes of Community Care for Asian Disabled People*, The Policy Press and Joseph Rowntree Foundation.
- Victor, Christina R. et al. (2012), "Families and Caring amongst Older People in South Asian Communities in the UK: A Pilot Study," *European Journal of Social Work*, 15(1), pp. 81 – 96.
- Werbner, Pnina (1990) *The Migration Process: Capital, Gifts and Offerings among British Pakistanis*, Berg.